貴方が好きよ

桂樹 槐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貴方が好きよ

【Ｎコード】

Ｎ１８８２Ｄ

【作者名】

桂樹　槐

【あらすじ】

芹ヶ谷夜夢（せりがやのあ）、須賀秋穂（すがあきほ）と、その仲間たちが繰り広げる学園ラブストーリー？

プロローグ

「久しぶり、だね」
「ん？……あぁ、芹ヶ谷（せりがや）」
新しいクラスに入って、席につく。
「何年ぶりかなぁ？」
「2年前…かな。中三のときだったから」
「そっか、またよろしくね、須賀君」
苗字で呼ぶと、秋穂（あきほ）は不思議そうな顔をして、苦い顔をした。
「やだ、なんか変な感じがする、苗字で呼ばれると」
「そう？じゃあ、よろしくね、秋穂」

新しい生活のスタートです。

第一話

始業式が終わってから、恒例の自己紹介が始まった。
まあ流石に全員を知っているはずじゃないだろうから、良いんだけど、
春だしぽかぽかだし、眠たくなってくるんだよね……

「須賀秋穂（すがあきほ）です。
こんな名前ですが決して女じゃありませんのであしからず。
これから一年間よろしくお願いします」

……あ、何だ、一応気にしてたのか、名前のこと。
私は好きなんだけど、なぁ……

「あ、芹ヶ谷夜夢（せりがやのあ）です。
これから一年間よろしくお願いします」

ぺこっと頭を下げると、まばらに拍手が起こった。
なんだかな、秋穂の時とえらい違いだよね、女子の気合が。

ちらりと秋穂を盗み見ると、男子にしては長いまつげと、端正に整った横顔。
頬杖をついて、うつらうつらしてる姿だって、
なんとなく絵になるなー……と、思ってしまう。
中学のころから、誰かと付き合っているという話はなかったけれど、
彼氏にしたいと言う噂では、必ず名前が挙がっていたように思う。
正直私だってちょっとだけ、気になってはいるけれど。

「芹ヶ谷、なぁ」

「あ、はい？」
「暇じゃね？」
「……そうだねぇ」
「自己紹介なんてしなくたっておいおい覚えていくんじゃないかなー」
「あ、それは私も思う」

この通り、結構なかのよい部類だ（と思う）から、
そういう話はまったくできないのだ。
寧ろ、私がする気がない、だけかもしれないけれど。

「今回は碧（へき）も同じクラスだからさ」
「……水岡君？」
「そうそう。去年は違うクラスだった」
「私もね、知世子…ちょこと同じクラスなの」
「あぁ、チョコケーキ作るのうまかったっけ」
「そうなのそうなの美味しいのー」

支倉知世子（はせくらちよこ）は、小学校の頃からの友達だ。
ちょこ、というあだ名にふさわしく、チョコを使ったお菓子が上手。
私も料理は得意なほうだけれど、
チョコを使ったお菓子だけは、なんとなくちょこに勝てない気がするから作らない。

「また作ってこないかなー」
「私言ってみようか？」
「いいね、昼にでも」
「うん、今日頼んどくよ」
「そこ、うるさいぞー」
「「はーい！」」

こういう風に、何でもない話ができることが、
ちょっとだけ嬉しかったりする。
だけど、どうしても、女の子の視線が怖かったりするわけだ。
秋穂が気にしてないから、私も、極力気にしないようにしているけれど。

第二話

「あ、須賀くん！」
「んあ……あぁ、芹ケ谷（せりがや）」
「あ、名前覚えててくれたの？嬉しいなぁ」
「んー…」
「眠い、ん、だね」
「……ちょっと」
「まぁ、ぽかぽかしてるもん、眠くなるよね。前、良い？」
「どうぞ」
「ありがとう」

いすを少しだけ引いて、須賀くんの前の席へ座った。
須賀くんはまだ眠いらしく焦点の定まっていない目で
一生懸命こちらを見ている感じがあって、なんだか可愛い。
でも、そうだな、全体的に綺麗な顔してるから、そう思うのかな。

「……何？」
「あ、目ぇ覚めた？」
「そんだけ見つめられたら、覚めるでしょ」
「そっか、ごめんね」

いや別に、そろそろ起きないといけなかったし、
と微笑んでくれる須賀くんは、やっぱり優しい、と思う。

「ねぇ、秋穂って呼んでも良い？」
「何で？」
「……なんとなく、かなぁ…。須賀くんって呼びにくいの」
「濁点入ってるからかな？よく言われる。女子に」

「女子だけなんだ」
「男子は自然に名前呼びになるから」
「あ、そっか」
「うん、いいよ、秋穂って呼んで」
「ありがとう」

そういえば…こんなに長く秋穂と喋るの初めてだ。
そう切り出したら、本当だ、と秋穂も納得していた。
私は、女子がいつも遠巻きに見ているから話しかけにくかったわけで、
でも秋穂はきっと、私になんか興味がなかったのだろう。
うあなんか傷つくな自分で言っといてなんだけど。

「頑張ろうね、秋穂」
「？…何を？」
「…一年間、頑張らないといけないでしょ？そしたら卒業だよ！」
「高校が、あるけどね」
「…まぁ、それはそれ、これはこれ」

んまぁ、それでいっか、と二人で笑った。
夕日が照らす秋穂の顔が、すごくすごく綺麗だった。

第三話

「てぇぇおうぁぁぁ！！！！」
「どうした夜夢（のあ）ぁぁぁぁぁぁ！！！」
「ちょこ、ちょ、ちょこ、ごっごっごっごっ……」
「ゴキ〇リ？」
「皆まで言わないでよ秋穂！！」
「学校にゴキ〇リですかー…」

おぅあぁぁぁぁぁぁ！！！と叫んでやると、秋穂はケタケタと面白そうに笑った。
ちょこは秋穂ではなく秋穂にくっついている水岡君をばしんと殴った。

「いってぇ！」
「ちゃんと教育しなさい！友達は！！」
「殴るなよ！ちょこの馬鹿！」
「お前がちょこなんて馴れ馴れしく呼ぶんじゃないよ碧（へき）」

秋穂は声を押し殺しながら一生懸命笑っている。
私も噴出してしまったので、我慢していた分一生懸命笑うことにした。

「何よ、何笑ってるの！」
「失礼だろ、笑うな！」
「二人とも、仲が良いねぇ」
「羨ましいくらいだ」
「「どこが！」」
「……“喧嘩するほど仲が良い”？」

「あぁそうそれだね、それだよね！ぴったりだよ、凄いね秋穂！」

パチリパチリと拍手をすると、
ちょこと水岡君が凄くない！と二人同時に怒鳴りつけてきた。
それなんだってば、いちいちハモっちゃうところとか、
仲が良いのがよくよくわかっちゃうんだから。

「夜夢（のあ）が須賀秋穂と仲良くしたら、
碧（へき）まで着いてきちゃうんだから、止めてよね！」
「……と、言われても……」
「せっかく仲が良い人なんだから」
「ねぇ、秋穂」
「うん」
「付き合ってるわけじゃあるまいし……」
「秋穂を誑かすな、離れろ千代子！」
「私じゃないでしょ！夜夢（のあ）じゃない！」
「一気に私が悪者になってるんだけど、仲間じゃなかったの！」

取っ組み合いでも始まってしまいそうな雰囲気を醸し出しているちょこと水岡君に、
ていやっと消しゴムを投げ付けると、
うまく当たって本格的に二人ともの標的が私に代わった。

「痛いだろ！」
「なにするのよ夜夢（のあ）」
「仲いいじゃない！なによ、私に標的を乗り換えないで豫二人して」
「やめろよいい加減……芹ヶ谷も困ってるし」
「「だって消しゴム……っ、」」
「真似すんな！」「真似しないで！」

ぐぐぐ……っと拳を握り締めて、私は力いっぱい叫んだ。

「いい加減にしろぉぉぉおおお！！！！！！」

「あっはは、怒った怒った」
「秋穂も、笑ってないで何か言ってよ」
「止めたら？いい加減帰ろうぜ、教室誰もいなくなったよ」
「……ほぉ、誰のせいだ？」
「あんたでしょ？」
「お前だろ」
「どっちもじゃん」「どっちもだ」

結局帰ることができたのは、そこから三十分ぐらい経ってからだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1882d/

貴方が好きよ

2010年11月30日03時37分発行